

## 《書評》

### 痛みのサイエンス 半場 道子 著

富永 真琴 (自然科学研究機構岡崎統合バイオサイエンスセンター  
生命環境研究領域 細胞生理部門)

著者半場道子先生が書かれているように、痛み研究者パトリック・ウォールがその著書「痛みへの挑戦」で述べた「人類が解決のために努力を傾けなければならない問題の中で、痛みへの挑戦においてこれに勝るものはない」は、痛み研究の重みと深さを示しています。有史以来、私達人類がそのメカニズムの解明に挑戦し続けてきた痛みは、未だ完全には解明されておらず、したがって治療法も確実なものはありません。私達が身近に日々感じる痛み、病院を訪れる患者の多くが訴える様々な痛みがどれほどまでに多くの人々を苦しめてきたか、また、どこまでそのメカニズムや治療法が明らかになってきたかをこれほどまでに詳しく、しかも分かりやすく記述した書を私は知りません。臨床の患者を診、痛み基礎研究に携わった著者だから完成しえた書と言えます。著者は「文学と絵画に見る痛み」で痛みが文学や絵画の対象となってきたことを伝え、「痛みの意義と種類」で痛みの基礎を語りかけ、「痛みのメカニズム」で痛みに関する最新の知見を紹介し、「痛みを抑える薬物と治療法」で種々の鎮痛薬、鎮痛療法を説明して、「しばしば経験する痛み」で日常経験する身近な痛みについて対話形式で解説します。読み終えた読者は、痛みについて、それが身近なものでありながら非常に複雑は症状群であり、先人がその解明と治療法のためにどれだけ努力を重ねてきたかを知ることになります。また、痛みを起こす原因、メカニズム、それに対応した治療法を学びます。痛み研究をしてきた私も、恥ずかしながら知らなかったことがたくさんあります。それは、痛みが疾患ではなく、臨床のほとんど全ての診療科



に及ぶ症状であることによるのかもしれませんが、我が国ではペインクリニック医が専門的に主に慢性の強い痛みを持つ患者を診察しますが、多くの医師が痛みを持つ患者に対応します。本書にある全てを理解している医師はそれほど多くはないのではないのでしょうか。痛みを十分に理解して初めて痛みを訴える患者を診察できると私は信じます。その意味で、痛みを訴える患者を診察する全ての医師に本書を読んでほしいと思います。専門書店の医学書の棚にあるどの本より分かりやすく多くのことが書かれているからです。また、痛み苦しむ人にも本書を読んでもらいたいと思います。自分が感じる痛みのことを理解することによって、よりよい痛みへの対処を学び、痛みに向き合う術を理解することができるからです。医療先進国アメリカで、痛みによる経済損失が莫大な額になり、「痛みの制御と研究の十年」の宣言が議

会で採択されたのが2001年です。高齢化社会に突入した我が国で、生理学に関わる人もそうでない人も、多くの人が本書を読み、痛みの意味と現状、治療法を学んで痛みとその研究の重要性を理解す

ることを願ってやみません。それが、痛みで苦しむことの少ない社会へとつながることになるからです。著者半場道子先生に心から感謝したいと思います。